



聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

「43歳で始めた職人人生」 - 木目込人形を学んで、教えて -

はっ かく ひと よ
八角仁代

1937年(昭和12年)
千葉県銚子市生まれ
松江在住



「人形学院」に出会う

事務用品が必要になり浅草橋へ行ったんです。向かい側にある人形店の「久月」で人形を見ていたら、作りたくなってしまいました。長男が結婚する話がでていたので、孫でも生まれたらお人形さんでも作ってやろうかなと。それはすぐにはできないでしょ。だから「今日来たついでだ、入学しちゃおう」と思って、3月3日のお雛様の日に久月人形学院に入学申込をしました。

私は子どもが男の子ばかり。女の子がいなかったので、かわいいお人形つくりたいなあ、人形だったら木目込人形がいいと思っていました。木目込人形は桐材で作られた本体に筋を彫り、筋目に布地の衣装を入れ込んでいくものです。久月人形学院では、最初は久月の既製品を使っただけです。もう入り込んだら、のめり込みましてね、昼間は仕事があるので、夜、夜中まで、それこそ寝るのも惜んでやりました。私、細かい作業が大好きなんです。自分の人生に「こんないいものが見つかった」って、嬉しくて嬉しくてね。それから学院の高等科、師範科となるのですが、師範科になると独自に自分で考え、顔彫りも全部自分で取り組みます。そういうふうには、人のやらないことをやらなければ上には上がれないんです。師範科を卒業すると教授認定を受けることができます。教授になる前にお雛様作っちゃったけどね。

昭和58年(1983年)、数えの47歳の時に教授になりました。私、お話が好きなのと人寄せが好きなんです。人に教えるには先生にならなければならない。私が教室を開けば、みなさんが来てくれると思ったんです。そうしないと、人とお話できないじゃない。家では男ばかりでしょ。

生徒さんは、ほとんどが近くの自営業の奥さんたちなんです。週に2時間なら2時間、休みをもらって来られるわけですよ。その2時間は自分の時間なんです。お嫁さん同士、悩みやいろいろなことを話し、楽しい時間を過ごして帰ったら、その日一日、家の中が明るくなるんじゃないかなあと思って。自宅での人形教室は10年。それからタワーホール船堀(1999年3月落成)で16、7年間。80歳近くまで教えていました。

いいものを作るには、人の作品も観ないとね。こうい

ころが上手だなあと思えば、教わったり習ったり。久月にはその後も週1回は行ってました。

木目込人形師として

オリジナル作品を出品しようとすると、1体作るのに1年くらいかかります。人形を作るときは、夜中にひとりでコツコツやります。図面を引いて、頭が何cmだったら肩幅は何cm、手の長さは何cm。人形が3歳の女の子なら振り袖だと思って袖を長くするとか。だから、最初から高さや幅がでます。

桐材を、首なら首の大きさに大体のところでもノコギリで切ります。それから小刀や彫刻刀を使い分け顔を彫り、ヤスリをかけ滑らかにします。頭と胴体は別々に作り、頭を胴体に組み込みます。顔に胡粉というハマグリの白い粉を塗り、眉毛や目は、狸・狐・イタチ・貉等の毛を使った筆で描きます。それぞれ毛の力が違うんです。目や眉は一発勝負ですから、集中して描かないとうまくいかない。顔を描くのと頭をやるのは全然違います。髪の毛は筆で1400本くらい描きます。

私は自分で布を染めたりもします。藍の種を蒔き花の咲く前に刈り、刈ったものを56度くらいのお湯の中に入れて色を出して取り出し、生地を浸けます。布地に色斑が出ないように一晩中かき回します。



◆お孫さんをモデルに

人形に着せる着物は昔の古い布地を探したり、久月に織物屋さんが入っているの、その織物屋さんで京都御所あたりで着ていたようなものを小さい柄で織ってもらったりしています。

桐材はほとんど久月で購入しますが、自分で作ることもあります。桐を4年間水に浸けて置き、腐った部分などを取り除いて芯の部分だけ残します。それから何年も乾燥させます。乾燥が不十分だと後でゆがみが出ますので。ノコギリや彫刻刀などの道具類は自分で研ぎます。

久月のおかげでいろいろな勉強をしました。京都御所を

見学したり、美術館に行ったり、歌舞伎を見に行ったり。歌舞伎の親子獅子、連獅子などの人形も作りました。そういう人形は、みんな外国へ行ってしまいました。

工場を切り盛り

私は千葉県の銚子で生まれ育ちました。5人きょうだいの長女です。第3人は父が戦地から帰ってきてからの子なので、私とは年が一回り以上離れています。母は大きい声を出したことがない、子どもを叱ったことがない人でした。だから自分が一生懸命やらないと、母は何にも言ってくれない。母について行けば間違いないと思って育ってきました。母は手仕事が好きで、いつも洋服に刺繍などしてくれました。私も夏休みの宿題に洋服などをつくり、賞をいただいたりしました。

父は鉄鋼業をやっていました。従業員もいましたので、私も母と一緒に賄いなどをしていました。そして、10歳年上の人と結婚したんです。

夫の姉が江戸川区に住んでいて、貸家をいくつか持っていたんです。私たち夫婦を江戸川区に呼び寄せてくれました。私の父も「3台でも4台でも工場の機械を持って行きなさい」と言ってくれたんです。機械部品の加工をするための工作機械です。夫と金属加工の工場を始めました。

東京オリンピック(昭和39年、1964年)の開催と同時に初めての新幹線開業(10月)という、その前の時期だから、ものすごく忙しくてね。新幹線のレールを留める圧金^{さかね}ってあるんです。私、^{せんばん}旋盤もやるしボール盤で穴開けもします。真っ黒になって働きました。東京に出てきたタイミングが良かったので、しばらくして家も土地も買うことができ、今思えば苦労はなかったですね。

子どもの頃から、長女の私が弟たちの面倒をみていました。彼らの学校卒業後は、うちの工場で働いてもらい、どこへ行っても仕事ができるように一人前にして、土地を買えるだけのお金を持たせてやりました。彼らは銚子に戻り、就職し、結婚もしました。

家業にも余裕ができたというか、私が「人形を習いに行く」と言ったら、夫が「いいよ、金曜日だけは」と言ってくれたんです。その代わり4時までには帰ってきて仕事をしました。夫は無口な人でしたが、よく働く人でした。

父が亡くなってからは、母が人形作りを学ぶために銚子から上京しました。私の家に2年間住み込み、久月の免状を取りました。それから田舎へ戻り、人に教えたり、干支人形を頼まれたり、個展を開いたりしました。母は60歳半ばから人形作りを始め、93歳で亡くなるまで人形作りをしていました。妹が最後まで母の面倒をみてくれました。

私が68歳の時、早くにからだを悪くしていた夫が亡くなりました。その後は私が全責任をもって息子たちと一緒に工場を続け、10年後に廃業しました。それからは、人形の世界と自分の気持ちのままに生きられた、そんな感じです。

80歳を越えて

人形作りを始めて20数年経った頃から、江戸川区の伝統工芸展の賞をいただけるようになりました。80歳の時には「区長賞」を、84歳の時には「東京都優秀技能者・知事賞」を。私が受賞すると、生徒さんたちや周りの方が喜んでくださるんです。そういうつながりは、すごく大事。だから、私も賞をいただくと「もっといいものを作らなくちゃ」と思うんです。

でもね、人形作りをしていると行き詰まることあるんです。「これ以上進めないなあ、いい物ができないなあ」という時が。その時はその場から離れる。

1ヶ月とか2ヶ月間の時もあります。それで他のものを作って、また挑戦。

73歳の時に、アメリカのアリゾナ州へ行きました。かつてアリゾナ大学の学生だった人が一緒に行ってくれたんです。現地のご家庭に1ヶ月ほどホームステイして、そこで個展も開きました。

82歳まで久月の理事をしていました。その後、体の具合が悪くしてなんにもやる気が起こらない時期がありました。そんな時に男友だちがドラマをやっているのを見て「かっこいいなあ、私もやってみたいなあ」と思ったんです。ドラマを叩きながら、昔懐かしい曲を口ずさんだりしています。

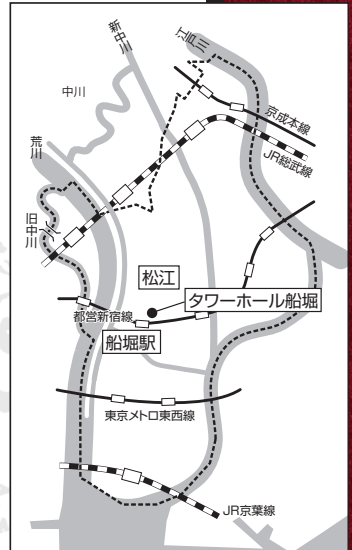
これまでに作った人形は何千体。私の人形は昔ながらの人形です。現代の多くのお人形さんは、和洋折衷のような感じになっているように思います。私は子どもが大好きなので、子どもの人形ばかり作るの。木目込人形は、やっぱり品格が違うんです。同じお雛様でも、着せ付けで手が出ている人形よりも、木目込のほうが「着物が体に添う」そんな感じがします。人形作りは姿・形も大事ですけど、最も大事なものは人形に動きが感じられるかどうかなんです。

好きなことを40年もやって来られた、いい人生だなあとと思います。よい先生に恵まれたのと熱心さを買っていただいたこと。それは本当に幸せだったなあとと思います。私、いつも感謝して寝るんですよ。「今日は一日ありがとう」って。

これまでも「挑戦がズーっと」でした。今も挑戦中です。今、全国展に出す作品を製作中です。その後は自分の生まれた所とか思い出の地とか、何か歌の文句でも残っていれば何か作りたい。そのために、今いろいろ資料を調べているんです。



◆江戸川伝統工芸保存会の展示会場にて



◆インタビュー/2022年5月
/2022年6月
/2022年9月
◆聞き手/小宮和枝、村田正子
◆コーディネーター/樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638-8089